

## 2つの旧“白バラ”映画を巡るドイツ・アイデンティティ：

“*Die weiße Rose* (白バラ)”と“*Fünf letzte Tage* (最後の五日間)”

古 川 裕 朗

(受付 2014年10月31日)

### 基 本 情 報

タイトル：*Die weiße Rose* (白バラ)

監督：Michael Verhoeven

脚本：Michael Verhoeven/Mario Krebs

受賞：1983年ドイツ映画賞作品賞（銀賞）

役者：配役（備考）

Lena Stolze: Sophie Scholl（途中で“白バラ”運動に加わる，主人公）

Wulf Kessler: Hans Scholl（“白バラ”のメンバー，ゾフィの兄）

Oliver Siebert: Alex Schmorell（“白バラ”のメンバー）

Ulrich Tukur: Willi Graf（“白バラ”のメンバー）

Werner Stocker: Christoph Probst（“白バラ”のメンバー，シオル兄妹といっしょに処刑）

Martin Benrath: Professor Huber（フーバー教授，ミュンヘン大学で政治哲学を教える）

Anja Kruse: Traute Lafrenz（ハンスの恋人，後に“白バラ”運動に加わる）

Ulf-Jürgen Wagner: Fritz（ゾフィの恋人）

Mechthild Reinders: Gisela Schertling（ゾフィの友人，ハンスに恋愛感情，後に“白バラ”運動に加わる）

Peter Kortenbach: Falk Harnack（社会主義・共産主義系の運動家，“赤い楽団”アルフィー  
ト・ハルナックの弟）

タイトル：*Fünf letzte Tage* (最後の五日間)

脚本・監督：Percy Adlon

受賞：1983年ドイツ映画賞作品賞（銀賞）

役者：配役（備考）

Irm Hermann: Else Gebel（拘置所でゾフィと同室の囚人，共産主義の運動家，拘置所で記録  
係を務める）

Lena Stolze: Sophie Scholl (“白バラ”のメンバー、ピラを撒いた罪で逮捕されている)

Hans Hirschmüller: Mahr (ゾフィの取調官)

Will Spindler: Beamter G (拘置所の事務官)

Philip Arp: Philip (拘置所の囚人、元役者・芸人、拘置所で給仕係を務める)

Michael Cornelius: Hans (“白バラ”のメンバー、ゾフィの兄)

## 1. 問 題 提 起

G・リュデカーによれば、ベルリンの壁崩壊を契機として、ドイツ社会における国民アイデンティティのあり方に変化が生じ、それに伴ってナチズムの歴史に対するかかわり方にも変化が生じたという。それゆえ、ドイツ映画と国民アイデンティティの関係を論ずるにあたり、彼はベルリンの壁崩壊の1989年を議論の起点に据えた。

例えば、1970年代に提示された「立憲愛国主義 (Verfassungspatriotismus)」が壁崩壊の頃にはすでに変容していた、とリュデカーは主張する。言論の自由や民主主義に立脚しようとする立憲愛国主義は、基本的には民族的 (ethnisch) な結びつきに対抗する価値基盤である。また一方において立憲愛国主義は、ドイツが50年代から60年代にかけて成し遂げた「経済復興の奇蹟 (Wirtschaftswunder)」に基づいて、ドイツ国民が即物的かつ神話的に結びつこうとする動きに対しても対抗的な関係にあった。ところが、極めて抽象度の高いこうした立憲愛国主義が、壁崩壊の直前においては、そうした経済復興の神話物語と結びつき、「立憲の誇り (Verfassungsstolz)」とも呼び得る形で情感的かつ象徴的に濃縮される現象が見られたという<sup>1)</sup>。

そして、リュデカーは、ナチズムの過去に対するかかわり方にも変容が見られると主張する。彼によると、壁崩壊以前はドイツ史の本質をナチズムと結びつけることで19世紀をナチズムの前段階と見なすドイツ観が支配的であった。こうしたドイツ観は、一般に否定的な意味を伴ってドイツに“特有の道 (Sonderweg)”と呼ばれる。ところが、この概念に関し、「アンチ・ナショナルで、ポスト・ナショナルな西ドイツ特有の道」というように、従来の方向性とは真逆の用法が壁の崩壊に際して出現した。ドイツの再統一はナショナリティを欠いた西ドイツ「特有の道」を終わらせるチャンスであると理解され、また「罪悪感コンプレックス (Schuldkomplex)」と呼ばれ得る過度に有責的で非歴史的なドイツ観は「病的 (krankhaft)」であったとも見なされ、よってドイツ・アイデンティティの歴史的基礎付けに対する不安の克服とドイツ史の正常化を模索する動きが生じたのだという<sup>2)</sup>。

1) Vgl. Gerhard Lüdeker, *Kollektive Erinnerung und nationale Identität. Nationalsozialismus, DDR und Wiedervereinigung im deutschen Spielfilm nach 1989*, München, 2012, S. 110–111.

2) Vgl. ebenda, S. 111–112.

こうした現象を鑑みるなら、ドイツ映画と国民アイデンティティとの関係に関する議論を1989年の壁崩壊を起点として始めることは十分に妥当なことであると言えるだろう。少なくともナチを題材とした2000年代のドイツ映画では、人道主義、民主主義、言論の自由、新国家の建設などの普遍性を帯びた価値をモチーフとし、外見上は脱ナショナルな物語設定の中に、“良きドイツ国民”のファシズムに対するナショナルな抵抗物語がドラマチックに展開されていたのであった。つまり、国民アイデンティティの形成が、立憲愛国主義の情動的な深まりと歴史の正統性の回復という文脈構造の中で試みられたのである。

とはいえ、このようなイメージ・ポリティクスと呼ぶべき視点に基づいたリューデカーの論究がさらなる説得力を持つためには、1989年以前のドイツ映画に言及することが必要になるであろう。なぜなら壁崩壊以前の状況と比べてみることで初めて崩壊以後のドイツ映画の精神動向もより明確になるはずだからである。したがって、本稿の問題意識は、80年代のドイツ映画へ向けられることとなる。その際、考察対象として取り上げるのは、M・フェアヘーフェン監督“*Die weiße Rose*”とP・アドロン監督“*Fünf letzte Tage*”の2作品である。この2作品を取り上げる理由や意義としては、次の5点を挙げることができる。

第一に、“*Die weiße Rose*”と“*Fünf letzte Tage*”の成立状況に関し、両者は二つで一つの映画と呼び得るほど、共通性および関連性が強いからである。両作品は共に1943年に起こった“白バラ”事件を題材としており、その事件から40年という節目の年を迎えるにあたって共に1982年に制作され、そして翌年の83年に双方がドイツ映画賞作品賞銀賞を受賞した。主人公のゾフィ・ショルに関しても同じ一人の女優レナ・シュトルツェが務めており、彼女は両作品に関して演技賞金賞を受賞した。

第二に、“白バラ”事件の自己犠牲的な物語は、ドイツの「良心」という形で、戦後一貫して“良きドイツ国民”像の重要な素材の一つであり続けたからである。“白バラ”はミュンヘン大学の学生を中心としたナチ時代のレジスタンス・グループで、メンバーとしてはハンス・ショルとゾフィ・ショルの名前がよく知られている。ショル兄妹は1943年に大学で反ナチのビラをまき、その場で逮捕され、そして処刑された。逮捕から処刑までわずか五日間であった。

第三に、同じく“白バラ”事件を題材とした作品“*Sophie Scholl: Die letzten Tage*”（2005年ドイツ映画賞作品賞銀賞）が2000年代にも制作されているからである。これによって壁崩壊以前・以後の諸作品を将来的に比較検討する機会ができた場合、題材の共通性は、そうした新旧の映画作品の比較検討をより有意義なものにするであろう。

第四に、旧“白バラ”映画2作品が制作され受賞を果たした1982年から1983年にかけての時期が、映画史的にも政治社会史的にも西ドイツにおける節目の時期にあたるからである。1982年は、ライナー・ヴェルナー・ファスビンダーの死んだ年であり、これによって一般に

は、いわゆるニュー・ジャーマン・シネマが終焉を迎え、ドイツ映画は衰退の時期に入ったと理解される<sup>3)</sup>。翌年の1983年に内務大臣F・ツィンマーマンが行った前衛的作品に対する公的資金の削減が映画の娯楽性を方向付けたことも、そうした時代の終焉とドイツ映画の衰退を告げるものであった<sup>4)</sup>。また1982年は、政権が社会民主党のシュミットからキリスト教民主同盟のコールに移った年でもある。これに伴って、社会政策・経済政策・文化的趣味における「保守主義的転回 (a conservative turn)」も指摘された<sup>5)</sup>。西ドイツの保守化を促した要因の一つとしては、1970年代後半に西ドイツ社会を襲ったドイツ赤軍派による左翼テロリズムの影響が考えられ、この一連の極左テロ事件は後に“Deutscher Herbst (ドイツの秋)”と呼ばれるようになった。その名称はファスビンダーたちのオムニバス映画“*Deutschland im Herbst*”に由来するもので、左派的傾向から保守的傾向へと潮目の変わる時期が、映画史における一時代の終焉と重なっていたことは、予め強調しておく必要があるだろう。というのも、このような転回現象は、後述することになる旧“白バラ”映画2作品の精神的両極性とも符合し得ると考えられるからである。

そして、第五に、80年代初期のドイツ映画は、日本においてはほとんど知られておらず、前述したように映画史的にもドイツ映画の衰退期に入ったとされる時期である。こうした映画に対して、ドイツ・ナショナリティの視点から新たに意味付けを行い、その内容や特徴を日本国内に紹介することは大きな意義を持つに違いない。

さて、以上のような理由と意義から、本稿は80年代の始まりを告げる2つの旧“白バラ”映画“*Die weiße Rose*”と“*Fünf letzte Tage*”を考察対象として取り上げ<sup>6)</sup>、そこに描き出される“良きドイツ国民”像が壁崩壊以前の国民アイデンティティとどのように関連し得るのか、そうしたイメージ・ポリティクスの視点からの問いに応えていきたい。

3) Eric Rentschler, *Film der achtziger Jahre. Endzeitspiele und Zeitgeistszenerien*, Wolfgang Jacobsen/Anton Kaes/Hans Helmut Prinzler (Hrsg.), *Geschichte des Deutschen Films*, 2., aktualisierte und erweiterte Auflage, Stuttgart/Weimar, 2004, S. 282.

4) Ebenda, S. 284.

5) Sabine Hake, *German National Cinema*, New York, 2008, p. 179. [ザビーネ・ハーケ (山本佳樹訳) 『ドイツ映画』 (鳥影社, 2010年), 268頁。]

6) 使用したDVDは次の2点である。Michael Verhoeven, *Die weiße Rose*, Kinowelt; Percy Adlon, *Fünf letzte Tage*, Zweitausendeins. 引用・参照場面については、DVDにおけるその場面の始まりのおおよその時間を本文中に記す。内容確認のために次のテキストを参照した。Michael Verhoeven/Mario Krebs, *Der Film „Die weiße Rose“: das komplette Drehbuch zum Film*, Karlsruhe, 1982. なお、テキストの見当たらなかった“*Fünf letzte Tage*”のドイツ語文字起こしについては、「ドイツ語学院ハイデルベルク」の協力を得た。この場を借りて、お礼を申し上げたい。

## 2. 方法：“白バラ”像を巡る力学の論点

80年代の“*Die weiße Rose*”と“*Fünf letzte Tage*”が制作されるまでに、“白バラ”像の前史と  
言うべきものが存在する。“白バラ”のイメージは、親族関係者の手記、マス・メディア、学  
術、文芸作品などの様々な領域から複合的に形成されてきた。特に歴史学の分野では、“白バ  
ラ”運動の意義評価を巡って多様な議論がなされ、“白バラ”像の形成に対して主導的な役割  
を果たしてきたと言える。その際、歴史学の中で試みられたのは、“白バラ”の英雄的あるい  
は贖罪的な自己犠牲的神話像を史実像へと引き戻すことであった。ただし、本研究が立脚  
するイメージ・ポリティクスの立場からすれば、どんな史実像であれ、情動的な公共圏の  
中であって特権的に中立透明であることはできない。それゆえ“白バラ”像の神話と史実は、  
同じ地平の内で相互の綱引きの力学の中に絡めとられていたと見なしておく必要がある。本  
節では、このことを踏まえつつ、運動の意義評価の論争史それ自体を紹介した2種類の歴史  
学研究を参照することで<sup>7)</sup>、“白バラ”のイメージがどのような力学の中で形成されてきたか、  
その主な論点を洗い出し、旧“白バラ”映画2作品の分析方法の準備に役立てたい。

池邊範子は、戦後、英雄的な自己犠牲神話の中にあった“白バラ”が、主として歴史学を  
通じて史実像を取り戻していく過程を論じている。まず50年代において“白バラ”の自己  
犠牲神話が形成された。その際、神話化の核となった出来事は、ショル兄妹が大学構内でビ  
ラを撒いた事件である。彼女らの行動は、キリストによる贖罪行為と重ねられ、ナチス・ド  
イツの罪を贖う「もうひとつのドイツ」、つまりドイツの「良心」を具現するものとして理解  
された。またショル兄妹が他のメンバーをかばって、すべての罪を被ろうとしたことから、  
仲間を守るための「自己犠牲」という表象もさらに付け加わることとなる。60年代になると、  
こうした理想主義的な英雄的自己犠牲神話に対して歴史学の分野から異議が唱えられるよう  
になる。C・ペトリは、“白バラ”運動の動機が、これまでの自己犠牲神話を支えてきた宗教  
道徳にのみ限定されるのではなく、一定の政治性に基づいていたと主張する。その後、80年  
代においてM・フェアヘーフェン監督の映画“*Die weiße Rose*”が従来の自己犠牲神話にさら  
なる異議を唱えた。そして、東西統一を果たした90年代になると、“白バラ”運動が将来へ向  
けた現実的な政治構想をも有していたことが指摘されるようになる。C・モルによれば、“白  
バラ”は北ドイツのプロイセン軍国主義から南ドイツの自由主義を切り離し、さらにはヨー

7) 参照したのは次の歴史学の2論文である。中井晶夫「白バラ抵抗運動の意味：二つの異なる評価をめぐって」『ソフィア：西洋文化ならびに東西文化交流の研究』第20巻第4号（上智大学，1972年），390-403頁；池邊範子「ドイツ連邦共和国における「白バラ」評価をめぐって：「白バラ」論争の現在的地平」『史論』第53巻（東京女子大学，2000年），68-85頁。



ロッパの理念を守るという明瞭な政治目的を有していたという。

池邊が“白バラ”像の通時的な変遷を論じたのに対し、中井晶夫は共時的にペトリと東ドイツのヤーンケ、二人の歴史研究を比較し、50年代からすでに始まっていたと思われる両者の論争の対立点を明らかにした。

ペトリの立場を整理するとこうである。“白バラ”メンバーの東部戦線における体験は、グループの中にロシア人への親近感を醸成させただけで、このことは彼らの非政治的な本質を示している。確かに“白バラ”は、社会主義グループ、キリスト教の思想家、国防軍との協力を模索した。彼らの活動の方向性が、宗教的理想主義に基づいた抽象的な主張から現実政治へ具体的に接続するものへと移行していったのは事実である。しかし、大学構内でのビラ撒きに関しては、英雄的行動と自己犠牲によって反抗の烽火を上げるという軽率な判断から政治的効果を失い、結局は挫折した。

一方、ヤーンケによれば、東部戦線での体験は政治的な意味を持ち、“白バラ”メンバーの中では、ソ連共産党ボルシェヴィズムに対して反感を抱くことに迷いが生じたという。いつしか“白バラ”は、大規模な組織作りを目指し、その際はドイツ共産党ともつながりのある社会主義者との共闘が重要な意味を担うようになる。だから、運動の内実は理想主義的に偏ったものではなく、現実政治の変革を指向するものであった。“白バラ”の活動は、未来のドイツ国民の運命に対する「政治的責任」を自覚しつつ、全ヨーロッパの精神にも影響を与えることとなる。こうして“白バラ”運動は、キリスト教を基盤とする内面的・倫理的反抗を乗り越えて現実的な政治闘争へと向かったのだという。

以上に基づいて“白バラ”像を巡る力学の論点を整理すると、第一に“白バラ”運動を動機付ける内面基盤が“宗教道徳”にあったか“政治思想”にあったか、第二に運動の活動指向が“理想主義的”であったか“現実主義的”であったか、第三に運動の結末・影響力が“無意味”であったか“有意味”であったか、の3点に絞り込むことができる。

さらに、より具体的な地平における力学としては、“白バラ”とソ連共産党ボルシェヴィズムないしドイツ社会主義との連携を巡る冷戦下東西ドイツ間の綱引き、およびナチズムの源泉を押し付け合う南北ドイツ間での相互牽制が存在したということも見逃してはならない。というのも、それぞれの力学の中では、“白バラ”像をいかに自らの立場に近づけて解釈するかの競合が存在したであろうと推測できるからである。

以下ではこうした具体的な地平も意識しつつ、主に先の3つの対立論点に基づいて旧“白バラ”映画の分析を行っていく。

### 3. “Die weiße Rose”の分析

“Die weiße Rose”が従来の英雄的な自己犠牲神話に対して否定的な立場にあったことは、前節で簡単に触れた。こうした映画の方針に関しては、監督のM・フェアヘーフェン自身も同様のことを述べている<sup>8)</sup>。特にショル兄妹が逮捕される直接のきっかけとなったミュンヘン大学構内でのビラ撒きに関し、自分たちをわざと逮捕させて人々をゆり動かそうとした最後の「破れかぶれ」の行動と見なすこと、つまり大学でのビラ撒きをそのような一種の「のろし (Fanal)」や「合図 (Zeichen)」と見なす従来の“白バラ”観にフェアヘーフェンは異を唱える。また、そこに「死への憧れ」や「自己犠牲」という意味を読み取ることにフェアヘーフェンは反対する。以下では、実際の映画がそのような作りになっているかどうかの検討も含め、まず物語のあらすじを確認した上で、続けて内容の詳細な分析を行っていく。

#### 物語のあらすじ

映画“Die weiße Rose”は、主人公のゾフィがミュンヘンにやってきて、“白バラ”運動に加わり、ついに逮捕され、そして尋問、裁判を受け、最終的に処刑されるまでを、一種の「スリラー」<sup>9)</sup>として描く。そのあらすじは、次の通りである。

1942年5月、ゾフィはウルムから兄の暮らすミュンヘンにやってきた。ミュンヘン大学で生物学と哲学を学ぶためである。ミュンヘンの駅では兄のハンスとその恋人のトラウテがゾフィの到着を待っている。これから期待に満ちた学生生活が始まる。しかし、駅ではゲシュタポの取り締まりがあり、すでに不穏なことの起きる兆しを見せていた。

ゾフィはさっそく兄ハンスとその友人たちの集うアトリエに招かれる。ゾフィの歓迎会を開いてくれたのは、ハンスとトラウテの他に、美術家志望のアレックス・シュモレルとピアノの名手ヴィリー・グラーフであった。実はそのアトリエは、ナチ抵抗グループ“白バラ”の活動拠点でもあり、地下ではビラの印刷が行われていた。この時点ではそのことをゾフィもトラウテもまだ知らない。

あるときゾフィは、トラウテからフーバー教授の講義に誘われる。ライプニッツの国家概念を熱っぽく高らかに語るフーバーの政治哲学講義は、学生たちから評判の授業であった。

8) Vgl. Michael Verhoeven/Mario Krebs, *Die Weiße Rose, Der Widerstand Münchner Studenten gegen Hitler. Informationen zum Film. Mit einem Geleitwort von Helmut Gollwitzer*, Frankfurt am Main, 1982, S. 197–199.

9) Barbara von Jhering, Die doppelte Sophie, *DER SPIEGEL*, 40/1982, <http://www.spiegel.de/spiegel/print/d-14349227.html> (2014年10月30日閲覧)。

教室にはナチの監視員がいるにもかかわらず、スピノザやフロイトなどのユダヤ人の思想を重要な思想として、ユーモアを交えながら、いかにも挑発的に取り上げることも人気の理由の一つであった。

一方、ハンスたちは学生生活と並行しながら、兵士としての義務も果たさなくてはならない。とはいえ、彼らはそれなりに学生生活を享受していた。インスブルックから休暇で戻ってきたクリストフ・ブロープストも加わり、ハンスたちは日々の生活を楽しみつつ、そして同時に“白バラ”の地下活動を続ける。ゾフィの方も父親がゲシュタポに逮捕されるなどの心配事もあるが、恋人フリッツの帰郷もあり、充実した日々を送っていた。

そんな中ゾフィは、講義室の机の中に“白バラ”の第一号ビラがあるのを発見する。ビラは講義室の外にも置かれていた。ゾフィはそのビラ一枚を家に持ち帰る。家に帰るとハンスはおらず、机の上には無造作に積み上げられた資料がある。ゾフィがその一つに目を落とすと、ビラの文言とその資料の或る文章が酷似していることに気づく。これをきっかけとして、ゾフィは、ハンスが“白バラ”の運動にかかわっていることを知るようになる。

“白バラ”の運動には大きな危険が付きまとうが、さらにメンバーはサボタージュ等のより実効性のある運動も検討し始める。そうした方向性にブロープストだけはたびたび異を唱えるものの、運動は少しずつ拡大路線を取り始めた。いつしかゾフィも運動に加わり、切手や紙の調達の際には、大胆な行動を見せる。同時にゲシュタポの捜査も厳しさを増していく。

やがてハンスたちは衛生兵として東部戦線に参加し、ゾフィの方は、軍需工場で勤労奉仕に就かなければならなくなった。そこでゾフィは、一人の女性ロシア人捕虜が、爆弾にパンを詰め込んでいるのを見かける。ゾフィはそうしたささやかな抵抗に共感を覚える。他方、ハンスたちが東部戦線において目にしたのは、凄惨な戦場であった。捕虜の虐殺を目撃するなど、ハンスたちは国防軍にも絶望するようになる。そんな中、彼らはラジオ放送でナチ抵抗グループ“赤い楽団”の中心人物であるアルフィート・ハルナックが逮捕されたことを知る。

1942年の冬学期が始まった。ハンスたちは知人を介して、アルフィートの弟ファルク・ハルナックとの共闘を模索するようになる。またハンスは、フーバーにも運動の協力を要請する。やがてトラウテも運動に加わった。あるときドイツ博物館で大管区指導者ギースラーが女性を侮辱する演説を行い、それに抗議する暴動が起きる。“白バラ”の運動は少しずつ効果を示し始めているように見えた。さらにギゼラも加わった。抵抗運動の輪が広がる一方で、運動を続ける上での不安、緊張、焦燥感も同時に強まっていく。国防軍との連携を求めるかどうか、武装蜂起のために社会主義者や共産党ボルシェヴィズムとの共闘を行うかどうかなど、フーバーと学生たちとの間でもなかなか意見がまとまらない。

1943年2月18日、ハンスとゾフィの二人は、大学構内でのビラ撒きを行った。焦る気持ち



の中ハンスが欄干に置いたビラが勢い余って階下に落ちる。そうした様子を大学の用務員が発見し、二人は逮捕される。安全のためと思ってハンスが身に付けていたプローストのビラ草稿もこの時に見つかってしまう。ハンスとゾフィはそれぞれ冷徹かつ陰険な尋問を受ける。家宅捜査の末、証拠を突きつけられた二人は、ついに犯行を認める。二人は、プローストと共に裁判にかけられ、三人は高飛車な裁判官から死刑を言い渡される。ハンスとゾフィはその後の両親との面会のときも、死刑の執行まで生きて抵抗する意欲を捨てなかった。しかし、2時間後に死刑が行われると係官から聞かされるとき、はじめてゾフィは落胆した姿を見せる。ゾフィは斬首の刑に処され、“白バラ”の抵抗運動は道半ばで挫折してしまった。

### 運動を動機付ける内面的基盤

まず指摘できるのは、運動を動機付ける内面的基盤としての宗教性が、映画全体を通して希薄<sup>10)</sup>である一方、登場人物が政治思想への明確な関心を示す点である。

例えば、物語の早々の場面で、フーバー教授の政治哲学講義に感銘を受けるゾフィの姿が描かれる [8:25]。フーバーの講義は、ライプニッツ哲学に関するもので、彼は自身の講義を「ライプニッツへの道 (Weg zu Leibniz)」と呼ぶ。フーバーはライプニッツの「国家概念 (Staatsbegriff)」に基づきながら、政治の目的は常に国家を創造・刷新し、勝ち取ってゆくことにあると語る。そして、フーバーによれば、ライプニッツの世界観の中心には、神・自然・観念上の可能的世界ではなく、「私たちの認識で捉え得る最も高次の個体としての人間」が登場してきているという [18:45]。こうして、宗教的観念性よりも政治的実在性に重きを置こうとする映画“*Die weiße Rose*”の立ち位置が示唆される。

また、そのフーバーの講義中には、机の中にあった“白バラ”第一号ビラをゾフィが発見し、それに関心を寄せる姿も描かれる。さらに、国家 (Staat) や人類の目的について語るこの第一号ビラの思想が、フーバーの語るライプニッツの政治哲学と呼応していることも示される [20:55]。こうして“白バラ”運動が、ドイツの政治思想によって動機付けられていることが明示される。

運動の動機付けの一つとして歴史学が注目するロシア人との交流に関しても、政治的な意味付けがなされている。ゾフィが軍需工場で爆弾の信管造りに勤労奉仕として従事した際、ゾフィとロシア人捕虜ルプヤンカとの間にはわずかながらも心の交流が生じる。しかし、それが宗教的ヒューマニズムへと接続することはない。むしろ爆弾の信管にパンを詰め込むというルプヤンカのささやかな政治的抵抗にゾフィは共感を覚えるのである [56:20]。

東部戦線における凄惨な体験も、それがハンスたち“白バラ”メンバーの宗教的な道徳観

10) Vgl. Lexikon des Internationalen Films, Hamburg, 1995, S. 6363.

に訴えるというより、政治的指向を促進するものとして物語上の意味付けがなされる。“白バラ”がやがて社会主義グループとの連携に傾くようになるのは、左派系のナチ抵抗グループ“赤い楽団”の指導者アルフィート・ハルナックの逮捕を東部戦線でのラジオ放送で聞いたこと [65:00]、また捕虜の虐殺場面を実際に目撃して国防軍に失望したこと [67:25] がきっかけとなっている。後に、社会主義者・共産主義者との共闘に反対して国防軍との連携を主張するフーバーと、ハンスは口論になるが [100:25]、東部戦線での体験はこうした出来事と物語上の必然性を伴って接続するところとなる。

もちろんキリスト教のモチーフが映画の中に全く存在しないわけではない。わずかながらの宗教的場面を列挙するなら次のようになる。クリストフ・ブロープストの子供の洗礼場面 [11:10]、裁判の中で気安く神の名を口にする裁判長フライスラーにブロープストが抗議する場面 [113:25]、裁判の後ゾフィが面会した母親から「イエズス」と言われる場面 [115:00]、2時間後の死刑執行を告げる係官から「聖職者があなたを待っている」と言われてゾフィが激しく落胆し、その直後にゾフィが明かり取りの窓から外の風景を眺める場面 [115:50] である。しかしながら、洗礼式は宗教的な敬虔さを重視して描かれてはおらず、仲間たちが楽しく交流を深める場面として描かれ、その間に裏で政治的な談義をする場面も挿入される。裁判長に対するブロープストの言葉も政治的なイロニーとしての意味合いの方が強い。また母親からゾフィに向けられた「イエズス」という言葉も、それが次の場面に宗教的な深まりを与えるわけではない。母親と面会した場面で、ゾフィは死刑の執行がそのすぐ後に行われるとは思っていなかった。そのため、母親の「イエズス」という言葉に対するゾフィの返答は、極めて低く力強い調子で発声されており、まだだいふ先の死刑執行までは生きて抵抗し続けることの決意が表れているように感じられる。そして、続く死刑執行の通告場面、および窓の外を眺める場面も一見、宗教的色合いを帯びているようにも見えるが、窓の高さはゾフィの背の高さと同じぐらいの位置にある。それゆえ、ゾフィの思念が向かう先は、天上の世界ではなく、政治的抵抗をまっとうできず多くをやり残してしまった現世の世界であると理解してよい。したがって、以上のような宗教的な場面も概ね政治的な色彩に染められていると言える。

## 運動の活動指向

次にグループの活動指向という観点としては、「良心」の呵責が一種の政治的な義憤として作用し、「暴力」に対しては現実的に立ち向かうとするハンスの意志が明示される点が重要である。ハンスはサボタージュや他の都市のグループとの連携を呼びかけ、他のメンバーもハンスの意見に賛同する [31:45]。“白バラ”の活動がこうした政治的現実主義へと移行していく様子は、後にいっしょに処刑されることとなるブロープストとの対比によっても明確化

される。プロープストだけが、自分たちの「やり方 (Mittel)」ではないとサボタージュに反対し、あくまで「精神的な抵抗 (geistiger Widerstand)」に留まるべきだと主張する [32:30]。ただし、プロープストのこの言葉もナチを「実際に (wirklich)」に排除できるのは、国防軍だけだという、現実的な政治判断に回収され得るものである。

ハンスは、ビラの配布を抵抗運動の初期段階に過ぎないと考えている。フーバーとの会話の中で武器を集める構想があることを示唆しているように [70:55]、ハンスは実効性と継続性という現実的な視点から将来的な武装蜂起の可能性も否定しない。アルフィート・ハルナックの弟ファルク・ハルナックとの接触の中では、教会関係者だけではなく社会主義者や共産党ボルシェヴィズムとの共闘が模索される [97:30]。したがって、運動の政治的方向性はドイツ国の解体に向かっていていると言える。

物語の山場であるハンスとゾフィによる大学構内でのビラ配布に関しても、理想化された英雄的要素は皆無である。“白バラ”神話の象徴である上階からのビラ撒きという行為は、ここではハンスが焦る気持ちの中で勢い余って階下に落とした結果に過ぎない。そもそも大学構内でのビラ配りは初めてのことでなく、今まで以上の特別な気負いはなかった。ゾフィが最初にビラを見つけた場所が大学の講義室であったように、すでに第一号のときからビラは大学構内で配布されていた。その際もビラを階下に落とす一般学生の姿が、後の場面を予告するかのように描かれていたが [19:50]、それでも大学の平穏は保たれていたのである。だから、ハンスとゾフィの行いを突発的で無謀なものと思ふことはできない。

その後、ハンスとゾフィは逮捕される。その際、ハンスが身に付けていたプロープストの書いたビラ草稿が発見され、最終的にハンスはそれを自分が書いたものとして罪を被ろうとする。とはいえ、これも理想化された自己犠牲的行為として理解することはできない。なぜなら、ハンスがプロープストの草稿を身に付けていたのは、その方が安全であるという現実を見据えた判断からであり [104:10]、それゆえ、ハンスが罪を被ろうとしたのは、結果的に判断を誤ったことの自己責任を引き受けているに過ぎないからである。

最終的にショル兄妹は逮捕され裁判にかけられる。その際の訴えも、活動の実効性を意識した政治的現実主義の観点からの言葉であった。二人は、ナチに抵抗したいと考える者はたくさんいるものの、あえてそれを言わないだけであり、だから、「誰かが始めなければならない。自分たちは単に始まりに過ぎない。」と叫ぶのである [113:35]。

物語の焦点を犠牲神話のシンボリック存在であったショル兄妹に限定することなく、個々の“白バラ”メンバーやその関係者たちを幅広く登場させ、一定の役割を持たせて描き出している点も脱神話的效果を生み出している。登場人物は日々の生活を享受しつつ、ときに口論したり、恋愛や情事に関わったり、場合によっては三角関係に陥ることもある。またその一方でも泰然と抵抗運動を行うのではなく、常に用心しながらの活動であり、物語が進むにつれ

て次第に強い不安、緊張、焦燥感に襲われるようになる。“白バラ”メンバーは理想化された聖人ではなく、リアルな等身大の大学生として描き出されていると言える。

### 運動の結末・影響力

最後に、運動の結末・影響力という観点では、“白バラ”の運動が一定の影響力を持っていたものの、それが意図せず道半ばで頓挫してしまったために、運動の有意味性は部分的なものに留まっていると言える。

この点に関しては、まず映画のオープニングに着目する必要がある。そこでは、“白バラ”第二号ビラの文言がテロップとなって登場する。それは、ナチ体制を揺るがすために、反乱の「波 (Welle)」や「空気 (Luft)」が広がることを呼びかけた内容であった。続けて、“白バラ”の関係者が絞首刑になったことを伝える実際の“白バラ”関係者たちの写真が映し出される。これら一連のオープニング内容は、“白バラ”の運動が一定の影響力を持った活動であったものの、その試みは残念ながら成就しなかったことを示そうとする映画“*Die weiße Rose*”の基本的な立場を示している。

映画の中では、運動の漸進的な影響力が示唆されるときもある。例えば、大管区指導者ギースラーの演説に対するドイツ博物館での抗議暴動は、一連の運動の成果の一つであると認識される [85:30]。しかしながら、ハンスとゾフィの逮捕によって抵抗の道は、志半ばで頓挫してしまった。冷徹で陰険な取り調べや裁判を行うナチの関係者たちは、単純な悪人として描かれており、ハンスとゾフィがナチ関係者に対して恐怖心、葛藤、罪悪感などの実際的な影響を与えるような場面は描かれていない。ハンスとゾフィは死刑確定後も、死刑執行までの間に何らかの変革を期待していたが、すぐの死刑執行が告げられてゾフィが落胆する場面が挿入される。ゾフィたちの闘いは、現実政治における闘争に他ならなかったのであって、一般のドイツ国民、ましてやナチ関係者を、ゾフィの死が自己犠牲的な意味を担って贖罪的な形で救済へと導くようなことはない。このように、運動の結末は大きな挫折感を伴って表現されていると言える。最後のテロップでも、“白バラ”メンバーの有罪が法的にはまだ取り決されていないことの理不尽さが指摘されている。このことは、“白バラ”運動が結果的には挫折してしまったことを示すものとして、つまり運動の有意味性を減じるものとして機能していると言える。したがって、政治的現主義の視点から描かれた“白バラ”運動は、その運動の有意味性においては部分的なものに留まっていると言わなければならない。

#### 4. “*Fünf letzte Tage*”の分析

映画“*Fünf letzte Tage*”は、“白バラ”事件から40年を迎えるにあたり、バイエルン放送がP・アドロンに監督を依頼して制作された作品であるという<sup>11)</sup>。この映画は前述の“*Die weiße Rose*”とは対照的で、従来の自己犠牲神話を踏襲する作品である。以下、物語のあらすじを確認した上で、内容の分析を行っていきたい。

##### 物語のあらすじ

物語は、ゾフィとエルゼの交流物語が大部分を占める。エルゼは共産主義の活動家で、拘置所ではゾフィと同室の囚人であった。その交流物語の間に、ときおり取調官マーア<sup>12)</sup>による尋問シーン、他の拘置所の職員・囚人との交流場面が挿入されるという物語構成になっている。

1943年2月18日（木）〔一日目〕。ミュンヘンのヴィッテルスバッハ宮殿にあるゲシュタポの拘置所で、エルゼ・ゲーベルは記録係を務めている。その日、二人の学生が逮捕されたという知らせが入った。彼女らは、街の壁にアジテーションの言葉を書き、そして大学構内でビラを撒いたという疑いをかけられていた。やってきたのは、ゾフィア・マグダレーナ・ショルという女学生と兄ハンスである。拘置所の事務官は二人の個人調書を作成し、写真撮影を行う。事務官は概ね穏やかで、ゾフィはこの事務官に親しみすら感じる。

続いてエルゼがゾフィの身体検査を行う。ビラなど、もし何か見つかって困るものがあれば処分しておく、とエルゼはゾフィに申し出る。実はエルゼもこの拘置所の囚人の一人であった。エルゼはゾフィと同じ部屋に移るよう指示される。そこは特別房で、普段は不穏当な発言をしたナチ党員が入れられるところである。だから、あまり悲観的になる必要はないと拘置所の守衛は言う。この拘置所でゾフィに辛く当たる者はいない。

印刷物送付用の切手を大量に所有していたのをゾフィはゲシュタポに見つかってしまった。このことをゾフィがエルゼに伝えると、エルゼはゾフィが“白バラ”のメンバーであることを確信する。エルゼが言うには、“白バラ”が何か活動するたびに、ナチの連中の間に動揺が広がったという。エルゼが担当の取調官は誰であるか尋ねると、ゾフィはマーアであると答えた。エルゼもゾフィも、マーアはまっとうな人物であると述べる。

1943年2月19日（金）〔二日目〕。ゾフィはその晩、部屋に戻らなかった。13時間もずっと

11) Vgl. Barbara von Jhering, *Die doppelte Sophie*.

12) 一般にゾフィの取調官はモーアと表記されるが、ここでは“*Fünf letzte Tage*”の表記・発音に合わせてマーアと記す。



尋問を受けていたのでしょうか？ 同じく囚人の一人で給仕係として働くフィリップによれば、兄のハンスはすべての罪を引き受け自供したという。フィリップとエルゼはたびたび情報交換をしているのであった。長時間の尋問を終えて戻ってきたゾフィに皆の注目が集まる。比較的、元気そうなゾフィを見て拘置所の皆が意外そうな顔つきをし、ゾフィがタバマァから本物のコーヒーをもらったと聞いて、その待遇にさらに驚いた顔を示す。ゾフィはタバコをもらい、部屋へと戻る。

部屋に戻ったゾフィは、窓を開け、外の空気を吸う。そして、すべての罪を自らに引き受けたことをエルゼに伝えた。その後、エルゼとゾフィはお互いに自分たちのことについて語り合う。エルゼは左翼共産主義者であった。エルゼの兄弟も共産主義者で、ただし彼は急進的であり、現在のドイツの破壊を目指していた。ゾフィは顔を洗い、突然、自分が小さい頃遊んでいた郷里の小川を思い出す。ゾフィは他の仲間たちのことが心配であった。

昼食を取りながら、ゾフィはタバの尋問について語り出す。取調官のマァによれば、ゾフィの兄ハンスの担当官は、ハンスのことを頭脳明晰で、ドイツの将来のかかった人材であると評したという。続けて、マァとゾフィの尋問シーンが挿入される。マァはナチズムの考えをゾフィに説く。一方、ゾフィはナチス・ドイツの蛮行について、罪の意識を感じていると述べる。エルゼによれば、マァはゾフィの命を救おうとしているという。ゾフィもそれを分かっているが、旧約聖書のモーセの物語を例に出し、妥協することはできないと主張した。そして、ゾフィは時おり見る夢の話をする。夢の中では神の息吹をハンスが吸い込み、そして勢いよくそれを吐き出すと世界が浄化されるのだった。

ゾフィの尋問が再び始まる。マァは何とかゾフィに歩み寄ろうとして、ハンスの様子を尋ねるゾフィの希望をかなえる。マァの取り計らいにより、取調室のドアが開け放たれ、ゾフィとハンスは遠くから見つめ合う。二人は他の仲間を守るために、自ら犠牲になることをお互いに確認し合ったかのようなのである。

部屋に戻ったゾフィは、パウロの「ローマ人への手紙」8章18節を読み上げる。その後、ゾフィとエルゼは自分たちの身の上話をし始めた。エルゼは見知らぬ人に施しを行うことがあるという。それを聞いてゾフィは、「御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。」という「ヤコブの手紙」1章22節の言葉を思い出した。

1943年2月20日（土）〔三日目〕。この日は土曜日のため取り調べはない。ところが、このような空白の時間はかえってゾフィにとって落ち着かない。夕方になると、マァが差し入れを持ってきた。加えて、囚人たちがそれぞれ食べ物を持ち寄り、ゾフィの部屋でささやかなお茶会が催される。フィリップが一人で無言劇を披露する。これが彼のかつての職業であった。ゾフィが礼を言うと、“白バラ”は自分たちの絶望の中の希望であったとフィリップは述

べる。その晩、ゾフィはエルゼと共にマティアス・クラウディウスの「月は昇りぬ」を語った。

1943年2月21日（日）〔四日目〕。“白バラ”のさらなるメンバーが逮捕された。エルゼがクリストフ・プロープストの名を出すと、ゾフィは叫び声を上げる。プロープストは新しいビラの草稿を書き、それをハンスが身に付けていたのだった。プロープストには3人の小さな子供がいて、妻は産褥についていた。

ベルリンからフライスラーがやってくる。裁判が明日に迫っていた。ゾフィ、ハンス、プロープストの3人が起訴されることになった。夕方、弁護士がやってくる。弁護士がゾフィの釈放の可能性について話そうとすると、ゾフィはそれを遮り、ハンスが死刑になるなら自分も死刑を望むと主張した。そして、ハンスは前線で戦ったことのある兵士なのだから、銃殺刑になる権利がある、とゾフィは弁護士に迫る。また自分は絞首刑になるのか、それともギロチンなのか、とゾフィは弁護士を問い質した。弁護士はゾフィの勢いに押されて黙ってしまった。

夕方、ゾフィは窓の下で淡い光に包まれている。自分は一片の樹皮でありたいと願う。栄光の日の到来を信じる中で、ゾフィの内には死の覚悟ができたように見える。そして、自分たちのことをきっかけとして、学生たちの中に変革が生じればよいと語った。

マーアがやってきた。今日中に家族宛の手紙を書いた方がよいという。しかし、次のシーンでは、ゾフィとハンスの手紙がプロパガンダ的であるという理由で、それを遺族に届けることが禁じられたことをマーアは告げる。

フィリップもやってきた。彼は「すべて」というハンスから言付かった言葉をゾフィに伝える。それは、「すべての暴力に抗って自己を保て」というゲーテの言葉を意味し、ショル家の家訓のようなものであった。エルゼはその言葉にのっとり、改めてゾフィに生き延びる道を促すがゾフィの決意は変わらない。ゾフィは自分が死んだ後のドイツについて考えるようになる。

1943年2月22日（月）〔五日目〕。ついに裁判の日が来た。エルゼがゾフィを起こしに来る。フィリップが朝食を運んでくる。ゾフィはフィリップに「さよなら」を言う。それから、エルゼとゾフィも別れの挨拶をした。午後エルゼは、ゾフィたち三人がギロチンで処刑されたことを知らされる。ゾフィのためにエルゼは神に祈りを捧げる。エルゼの手にはゾフィが「自由」と書き付けた紙があった。

### 運動を動機付ける内面的基盤

まず主人公ゾフィの行為を動機付ける内面的基盤であるが、それは宗教道徳に置かれていると言える。とはいえ映画の中でいっさいの政治性が消滅しているわけではない。政治性に

道徳性が対置され、道徳性の優位が示唆される中、最終的にその道徳性を宗教的なものが根拠づけるといふ物語構造を持つ。例えば、ドイツ・ナショナリティを巡って取調官マーアとゾフィが議論を交わす場面を取り上げてみよう。

マーアは、「人種 (Rasse)」には「良い (gut)」人種と「劣等な (minderwertig)」人種が存在するというナチズムの偏見に基づいて次のようにナチの全体主義を長々と主張する [33:00]。「国民国家 (Nation) の繁栄のために必要なのであれば、総統は不当 (Unrecht) な行いをしても構わない。我々は、総統が何を命令するかに関係なく、総統に従わねばならない。なぜなら、総統は全体 (das Ganze) のことを考えているのであり、我々は自分自身のことだけを考えているからである。ショルさん。自分の人道思想によく注意を向けてみたまえ。それは感傷癖なのではないだろうか。君たちは、自身のささいな個別道徳 (Einzelmoral) にこだわって、ヴァイマル共和国時代の混乱状態に戻りたいのかね？ あなたは、国防力破壊工作を呼びかけて、ドイツ民族 (Volk) が1933年以来偉大な犠牲を払って勝ち取ったものすべてを本当に打ち砕きたいのかね？ あなたも感じなければならないドイツの榮譽 (Ehre) というものがあるのではないだろうか。あなた自身の血だよ。あなたが望むとも、望まぬともね。ショルさん。あなたがこうしことすべてを考えに入れていれば、そのような軽はずみな行為をすることはなかったのではないかね。」

こうしたマーアの主張に対して、ゾフィは次のように反論する [34:40]。自分はもう一度まったく同じことをするであろう。なぜなら、間違っているのは自分の「世界観」ではなく、マーアの世界観であり、自分には「罪の責任がある (schuldig)」と感じるからである。そうして、ゾフィはナチス・ドイツの行った罪の内容を逐一、列挙する。ユダヤ人やポーランド貴族の女性に対する様々な蛮行、軍事的失敗の犠牲になった若者や無実の兵士、出産強制のごとき非人間的政策、言論と情報の統制、およびそのような人間蔑視の殺人政権と力や思考を通じて闘わなかったゾフィ自身の弱さ、臆病さ、無関心である。このようにナチスの罪を自らに引き受けようとするゾフィに対し、マーアは、ゾフィの行為は「祖国 (Vaterland)」に背くことだが、自分の行為は「祖国」を支えることであると主張する。するとゾフィは、あなたは「良心のやましさ (schlechtes Gewissen) をごまかしているだけだ」と再反論する。

同室のエルゼによれば、マーアの言葉にはゾフィを死刑から救おうする意図が込められていた。ゾフィもそれをよく分かっている。しかし、これを受け入れることは、「人間にとって価値あるものすべて」を台無しにしてきた者に与することを意味する。そうしてゾフィは、モーセが祈り続けるかどうかによって自身の民族の闘いの勝敗が左右される旧約聖書の出エジプト記17章11節の物語を例に出し、闘い続ける仲間のためにも「自分がいま祈りの腕を降ろすことは許されない」と語る [37:20]。こうしてゾフィとマーアとの間には、ドイツ・ナショナリティを巡って道徳と政治という価値観の対決が生じ、政治問題が道徳問題へと回収

された後、最終的に道德問題は宗教的課題へと昇華するところとなる。

### 運動の活動指向

したがって、次にゾフィの活動指向という観点では、ゾフィの行為は理想主義的なものとなる。この場合もゾフィの行為が現実性をまったく欠いているわけではない。現実的な目的を見据えた上で、その目的の達成方法が宗教道德に動機付けられているがゆえに、ゾフィの活動は理想化された従来の自己犠牲神話へ向かうものとなる。ここでは、ドイツの将来を救うという現実的な目的が神の力を借りたハンスによって実現されるという一連の物語イメージを取り上げてみたい。

ハンスがゾフィの釈放を願ってすべての「罪 (Schuld)」を引き受けたことが判明する場面がある [25:20]。ゾフィの方もハンスの釈放を願ってすべての罪を自ら引き受けようとしており、その気持ちを同室のエルゼに伝える [28:25]。私心を捨てて相手を思いやる行為は、理想化された従来の自己犠牲神話を支える重要な物語要素の一つであった。ただし、この場合もゾフィの行為は現実とのつながりを失っているわけではない。このことはゾフィの兄弟とエルゼの兄弟との比較によって示唆されるところとなる。

ゾフィが罪を引き受けることの決心をエルゼに伝えたとき、続けて、エルゼの境遇に関する話題となる [29:15]。エルゼは「左翼 (Linke)」「共産主義者」で、その種の手紙を配達した罪で捕えられた。エルゼの兄弟も同じく共産主義者として逮捕されている。エルゼが言うに、エルゼの兄弟は非常に急進的で、サボタージュや生活手段の破壊など「今のドイツ」を壊すことばかり考えているという。

場面が変わり、ゾフィの兄ハンスの話題となる [32:25]。ゾフィは、自分が罪のいっさいを引き受けて仲間を守ること、とりわけ兄のハンスを守ろうとすることは「賢い (schlau)」選択であったと述べる。というのも、ハンスがハンスの取調官から極めて「明晰な頭脳 (Verstand)」の持ち主であり、「ドイツの将来がかかった人材」であると評されていたことを、ゾフィがマールから聞かされたからである。ここでは“未来のドイツを建設する”ハンスと“現在のドイツを破壊する”エルゼの兄弟とが潜在的に対置されていると言える。

このようにゾフィは、兄ハンスに関しては現実的な視点から発想する。しかし、一方において、ゾフィ自身は自己の現実的な生を望まない [36:25]。エルゼが自分のためにも「賢く」あるべきだとゾフィを諭し、ゾフィも「生は生からのみ産まれる」ということを理解していても、ナチに与することを拒み、死を覚悟しつつ、先のモーセの物語にあるように、ゾフィは仲間のために祈りを捧げ、神の救済に期待する道を選ぶ。

こうした思想は続くゾフィの夢の中でも具象化されている。ゾフィが顔を洗っていると、窓の淡い光に照らされながら、彼女が時おり見る夢のことを思い出し、それについて語り始

める [38:20]。夢の中でゾフィは、兄ハンスおよび“白バラ”メンバーの一人であるアレックス・シュモレルといっしょに雪原の中を、腕を組んで走り回っている。ゾフィは今のような時代にあっても「神の現存 (Existenz) と活動 (Wirken)」の証があることを知っており、それは神の息吹としての空気に他ならない。人間は呼吸のためにたくさんの空気を必要とするが、やがて人間の息のために空が汚れるようになる。すると神は、人間の「血 (Blut)」の中の空気が欠乏することがないように、時おり自身の「息吹 (hauchen/Atem)」を世界中に浸透させる。この新たな空気をハンスが胸いっぱい吸い込み、そして勢よく吐き出すと、それが空気の柱となって上昇し、汚れた雲を払いのけ、青空が現れ、世界が浄化されるのである。

ハンスとゾフィが自分を犠牲にしてすべての罪を引き受けるところから、ドイツの将来を担うハンス、そしてゾフィの夢の中でハンスが世界を浄化する場面まで、これら一連の物語では「現実」が宗教的な理想世界へと回収されることが指向される。そして、この夢の内容は、実は映画冒頭の約 2 分のシーンにおいてすでに映像化されていたのであった。観者はこの夢のシーンにおいて初めて映画のオープニングがそうしたハンスを媒介とした神による救済のイメージであったことに気づくのである。

またこれらの物語の背景に具体的な聖書物語のイメージを読み取ることも不可能ではないであろう。すなわち、ゾフィが顔を洗う行為は洗礼であり、新約聖書では洗礼者ヨハネがイエスにヨルダン川の水をかけると神が顕現し、人類を救済するイエスが他ならぬ神の子であったことが告げられるのであった。したがって、ここではドイツの将来を担うハンスが神の子イエス・キリストに重ねられていると言ってもよい。

よって、この夢の内容をふまえるなら、すべての罪を引き受ける決心をしたことをエルゼに伝える直前にゾフィが窓を開けて新鮮な空気を吸うシーンが [28:05]、実は神の息吹を意味していたことも明らかとなる。そして、エルゼの兄弟に関する場面の後、窓の淡い光に照らされながらゾフィが顔を洗っていると、幼い頃に遊んだ川のことを唐突に思い出すという一見、無文脈なシーンも、実はイエスの洗礼を示唆していたということが理解できる場所となるであろう [30:05]。

以上のように、冒頭のシーンをはじめとして、この夢の内容へと収斂し得る象徴的な場面が複数存在することからも、現実が宗教的な理想世界へと回収されるというそうした発想は、映画全体に通底するものであったと言ってよい。

## 運動の結末・影響力

そして、活動の結果・影響力という観点では、道徳的・宗教的な動機付けを背景として、理想主義的なものを指向するゾフィの行為は、その有意味性において限定的なものに留まる。



確かに“白バラ”の運動が実際に影響力を持っていたことを示唆する場面もある。例えば、ゾフィが“白バラ”グループの一員であるとエルゼが理解したとき、エルゼは、「今日、誠実（ehrlich）なドイツ人であれば誰でも自分たちの政府を恥じている」という“白バラ”のビラの文言を取り上げ、それに賛同の意を示し、ナチの連中の間に動揺が広がったことをいかにも痛快だと言わんばかりに語る [21:20]。続いてその流れで、ゾフィの取り調べを行うマーアについて、エルゼとゾフィが「まっとうな（anständig）」という道徳的評価を与える [22:05]。これはナチのゲシュタポであるマーアが本来的には「誠実なドイツ人」であり得たことを示唆しており、“白バラ”の運動が潜在的な良きドイツ人たちを動かす可能性を有していることを示している。またゾフィが、ドイツの将来を担うべきハンスの命を救おうとして罪のすべてをゾフィ自らが引き受けようとしたことは、すでに述べたことである。

しかし、特にハンスとゾフィがマーアの取り計らいによって逮捕以来の再会を離れたところから眼差しの交差を通じて果たしたとき [43:05]、観者には、その二人の姿が他の“白バラ”の仲間を守るべく、すべての罪を引き受け、死の覚悟をお互いに確認し合っているかのように映る。こうして、それ以降、運動の成就是もっぱら神の力に間接的にのみ期待され得るだけのものとなる。

例えば、ゾフィは、パウロの手によるとされる「ローマ人への手紙」の8章18節から25節までを朗読する [44:00]。そこでは、現在の「苦悩（Leiden）」がいつか「啓示される栄光（Herrlichkeit）」につながるものとされ、私たちにはそうした「目に見えぬもの」への「希望（Hoffnung）」を持ち続ける「忍耐（Geduld）」が要求される。こうした将来の栄光の成就是、直接的にヒトラーを倒すことよりも、ゾフィが言及する「ヤコブの手紙」1章22節にあるように [48:15]、神の言葉を実際に行動に移すこと、つまり日々の善行を積み重ねることによってのみ期待される。拘置所の囚人で給仕係を務めるフィリップは、“白バラ”がゲシュタポを含めた様々な人々に感銘を与えたこと、そして“白バラ”が自分たちの「希望」であり続けることをゾフィに語る [71:50]。しかし、ここでの「希望」もこれまでの文脈を考えるなら、映画の冒頭において示されたような政治上の実際的なものではなく、あくまで宗教上の理念的な希望に他ならない。

やがて、神の栄光を期待すると同時に、ゾフィの意識は強く自分たちの死へと向かっていく。例えば、フィリップたちとのささやかな晩餐の後に続く場面で、ゾフィはエルゼと共にマティアス・クラウディウスの「月は昇りぬ」を誦んじる [73:10]。これは、ゾフィの思いがすでに天上の世界へと向かっていることを示していると理解してよい。弁護人との会話においても、ゾフィは自身の釈放の可能性を自ら放棄し、自身の死刑とハンスの名誉ある銃殺刑を求める [85:00]。そして、シオル家の家訓的な存在であった「すべての暴力に抗って自己を保て」というゲーテの言葉がハンスからフィリップを通じてゾフィに伝えられたとき

も、この言葉は、「良心を捨ててはならない、必要な場合は、そのためにすべてを賭ける」という意味だとエルゼに語り、死への決意を改めて明らかにするのである [90:20]。

一方でゾフィは、自分が死んだ後の世の中についてもたびたび思いを馳せるようになる。しかし、死後に訪れるはるか遠く先の栄光というイメージは、もはやゾフィ自身には直接手の届かないものという印象をさらに強めることとなる。例えば、ゾフィは、自分たちの身に起こった出来事が学生たちの実際の蜂起につながればよいと願うが、それは窓の淡い光に照らされながら「栄光の日よ、私は行かねばならない」と述べた直後のことである [87:30]。それゆえ、新たな学生動きは、ゾフィの手を離れたところで、あくまで間接的に期待し得るものに過ぎない。またゾフィが肉親や恋人に宛てて書いた手紙の中に、いつかゾフィたちの行為が有罪ではない日がやってくることを願う内容が書かれていたことを、マーマが観者に向けて告げる場面もある [88:45]。しかし、結局この手紙についても、ナチの法手続きの中でプロパガンダ的と判断され、相手に渡らないことをマーマが明言する。つまり、物語はむしろ、そうしたゾフィの願いが潰えてしまったことを強調するのである。

さらに、ゾフィの死後に訪れる神の栄光は、贖罪的な意味を持つようになる。彼女が夢想するのは、ナチが過ぎ去りフランス語の本を人々が自由に買いに行くことのできるような平穏な生活である [92:25]。そして、その流れでゾフィは、ドイツが「思い上がり」を改めて「慎み深い国」になり、「他の民族国民 (andere Völker)」から再び受け入れてもらえるようになることを願う [93:45]。同時にまた、他国からの報復やドイツの消滅を懸念するエルゼに対して、ゾフィはそのようなことはないと明確に否定し、続けて「自分はドイツを去りたいなどと思ったことはない、両親からも、兄弟姉妹からも」と述べる。こうして、ゾフィの抵抗運動と自己犠牲は、ドイツ・アイデンティティの自覚と共に、実質的な影響力から遠ざかり、ドイツの将来のための贖罪的な観念的影響力へと限定されていくのである。

## 5. 考 察 と 結 論

“*Die weiße Rose*”と“*Fünf letzte Tage*”のここまでの分析を、両者の相違点を意識しながら、もう一度振り返っておこう。

映画“*Die weiße Rose*”は、従来の“白バラ”像が有する英雄的・贖罪的な自己犠牲的神話像を崩す作品である。この映画では、ライプニッツの国家論など近代ドイツの政治哲学を背景とし、ロシア人との交流や東部戦線での体験など、個々の重要な意味事象が登場人物の政治的な動機付けへと回収されていく。登場人物の活動は現実的なものを指向し、運動の性格は次第に急進性および実効性の色合いを強める。やがて運動は、戦争の終結とナチ政権の打倒という目的のためには、社会主義や共産党ボルシェヴィズムとの共闘による武装蜂起をも

模索するようになる。基本的に運動の方向性はドイツの解体へと向かうのである。そうした先鋭的な運動を“白バラ”のメンバーたちは泰然と進めるのではなく、極度の不安や緊張、そして焦燥感の中で行う。よって、そこに英雄性はなく、個々の学生たちは、それぞれの人格的特性を持った普通の等身大の大学生であることが強調され、仲間同士で恋愛や口論をするなど、日々の生活を享受する姿も描き出される。他方、ナチの関係者は複雑な人格を与えられてはおらず、端的な悪人として描かれている。したがって、ナチの連中を救済する道はなく、力によって打倒するしかない。それゆえ、運動の影響力は現実的なものが求められ、登場人物もできるだけ生き延びる道を模索するが、その志は道半ばで頓挫してしまった。よって、映画の結末が与える挫折感は大きく、運動の有意義性は部分的なものに留まる。

一方、多くの点で“*Die weiße Rose*”と対照的な“*Fünf letzte Tage*”は、従来の“白バラ”像の自己犠牲的・贖罪的な性質を引き継ぐ作品である。この映画では、キリスト教的な道德観に動機付けられながら、拘置所のゾフィがゲシュタポのマーアとの対決、および同室の囚人で共産主義者でもあるエルゼとの交流の中で、政治的な問題を道德的問題へと、そしてさらに宗教的な課題へと昇華させていく。ゾフィはナチス・ドイツの行ったことに対し、ドイツ国民として強い罪の責任を感じている。そうしたゾフィは、目的としてはドイツの将来という現実的なものを見据えるものの、“*Die weiße Rose*”とは異なり、問題を解決するために急進的な破壊活動を行うことは映画の中で潜在的に批判される。むしろ手段としては自己犠牲という方法を取り、それゆえ活動指向は理想主義的なものとなる。いくつものキリスト教的モチーフが映画の中に散りばめられ、この世界は神の救済によって理想的世界へと浄化されなければならない。ナチの関係者も決して単純な悪人としては描かれておらず、本来であれば、神の栄光によって救われる可能性もあった。ただしそのためには、直接的にヒトラーを倒すというよりも、人々は日々の善行と努力を積み重ねた上で、後は神の栄光の到来を待ち望むしかない。しかし、こうした栄光はもはやゾフィたちの死後にのみ期待し得るものである。“*Die weiße Rose*”とは大きく異なり、次第にゾフィは死への自覚を強めていく。そうしてゾフィの死後において最終的に望まれるのは、ドイツの救済である。よって、ゾフィの抵抗運動と自己犠牲の結末は、ドイツ・アイデンティティの自覚と共に、実質的な影響力から遠ざかり、ドイツの将来のための贖罪的な観念的影響力へと限定されていくのである。

では、以上の比較考察をふまえるなら、両映画が情動的な公共圏の中に投げ込まれたとき、本稿が主題としていたドイツ・アイデンティティの醸成に関して、いかなる波紋が呼び起こされると考えられるだろうか？あるいは別の言い方をするなら、ドイツの国民アイデンティティは、これらの映画を通じ、80年代の時代状況の中で、どのような形で焦点を結び得ると考えられるだろうか？この点に関して“*Die weiße Rose*”が基本的に提示するのは、ドイツ・アイデンティティの自己解体である。すなわち、この映画は、「ライブニッツへの道」の遠方

に正統なドイツ精神を見据えながら、ナチズムに基礎付けられた80年代のドイツ観、つまりドイツに「特有の道」の自己解体を促すものとなるであろう。反対に“*Fünf letzte Tage*”は、ドイツ・アイデンティティをナチス・ドイツに関する贖罪の文脈において自覚することを促し、ドイツに「特有の道」を踏襲・補強するものとなるであろう。このような両極性は、社会民主党からキリスト教民主同盟へと政権が交代したこと、つまり西ドイツ社会が左派的傾向から保守的傾向へと転換する潮目にあったことと即応していると考えられる。

とはいえ、両映画のそれぞれが、保守・左派どちらか特定の傾向に合致するというように、単純に図式化し得るわけではない。なぜなら、“*Die weiße Rose*”が描き出すボルシェヴィズムと“白バラ”の武装共闘の可能性、対する“*Fünfletzte Tage*”におけるそうした左翼武力闘争の否定は、双方とも70年代後半において勃発した極左テロリズムや東ドイツの統制社会との関係において、保守・左派それぞれの立場にとり、都合良くも、都合悪くも、多様な形で作用するに違いないからである。また“*Die weiße Rose*”が描くベルリン国防軍の親ナチ的でも反ナチ的でもある両義的な姿は、南ドイツと北ドイツとの間の力学に関しても影響を与えるであろう。よって、2つの旧“白バラ”映画は、それぞれが特定の立場の傾向に沿っていると言えるわけではない。しかしながら、少なくとも両作品が示す両極性は、ベルリンの壁崩壊以前の80年代初期において、西ドイツ社会がドイツ・アイデンティティを形成する上で、いかに混乱と困難を抱えていたかを示している、と言うことはできるであろう。

本稿は第65回美学会全国大会（2014）での発表原稿の一部に加筆・修正を施したものである。

本研究は JSPS 科研費26370192 の助成を受けたものである。

Abstract

The German Identity in two former Films about the White Rose:  
“*The White Rose*” and “*Five last Days*”

Hiroaki FURUKAWA

This paper treats two films about the White Rose, “*The White Rose*” and “*Five last Days*”, in order to thoroughly examine the German national identity portrayed in the German films of the 1980s, before the fall of the Berlin Wall. The White Rose was a German Resistance that opposed Adolf Hitler’s Nazi Germany. The main members of the resistance group consisted of students from the University of Munich. Hans and Sophie Scholls were well known for distributing leaflets in the University of Munich. They were arrested in February 1943, tried, and executed in five days for their actions.

The film, “*The White Rose*”, depicts the story of Sophie’s coming to Munich until her execution. The members of the White Rose in the film are impressed by modern German political philosophy such as those of Leibnitz, and prepare themselves to take the case to jointly fight with communists if Nazi Germany should be overthrown. As a result, this film suggests a radical dissolution of the German identity based on Germany’s so-called special path (Sonderweg), by means of reverting to the way of Leibnitz, which also means returning to the original modern German spirit, regardless of who they join forces with.

On the other hand, the film “*Five last Days*” depicts a story about an exchange between Sophie and Else, who is a communist and prisoner, sharing a room with Sophie in jail. Else’s brother is a radical communist whose sole objective is to destroy Germany, while Sophie’s brother, Hans, is referred to as a person who is necessary for the future of Germany. Sophie has a beautiful dream in which God blows into Hans and Hans exhales God’s breath. Just then, the clouds of dirt are blown away and the sky clears. Sophie senses strong guilt as a German national about the barbarous acts of Nazi Germany and comes to feel that the Germans cannot atone for the sins without the help of God’s power. This film urges the awareness of German identity in a context of atonement against the background of Germany’s special path (Sonderweg).

“*The White Rose*” is oriented to realistic politics and “*Five last Days*” to idealistic morality and religion. The intentions of both are contrastive to each other, yet this pair films represents the division and difficulty of German identity in the early 1980s before the fall of the Berlin Wall.